

はじめの一步

テクニカル分析

ハンドブック(基礎編)

T E C H N I C A L A N A L Y S I S

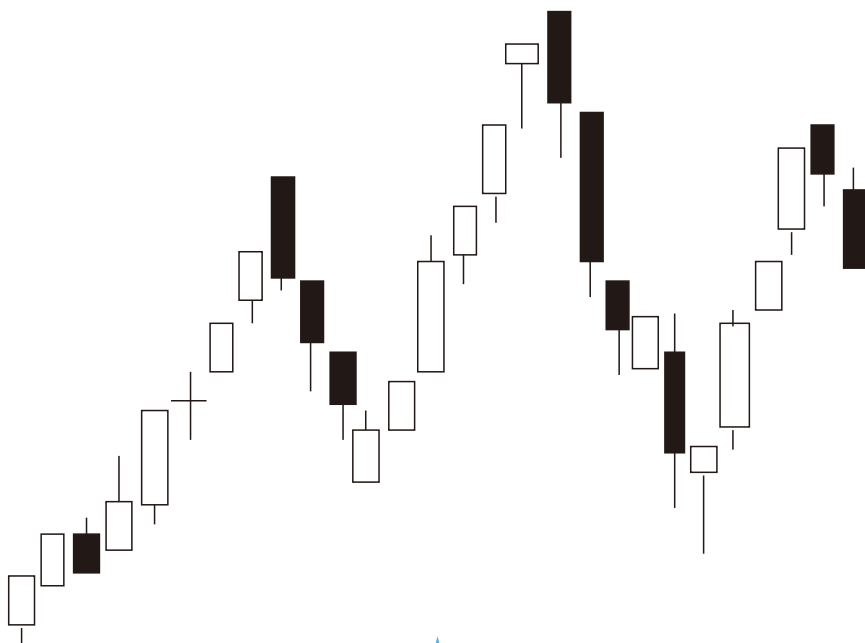


NTAA[®]
The Nippon Technical Analysts Association

国際テクニカルアナリスト連盟 (IFTA) 加盟
日本テクニカルアナリスト協会[®]
特定非営利活動法人 (NPO 法人)

テクニカル分析の第一歩

まずは、ローソク足（12番参照）から

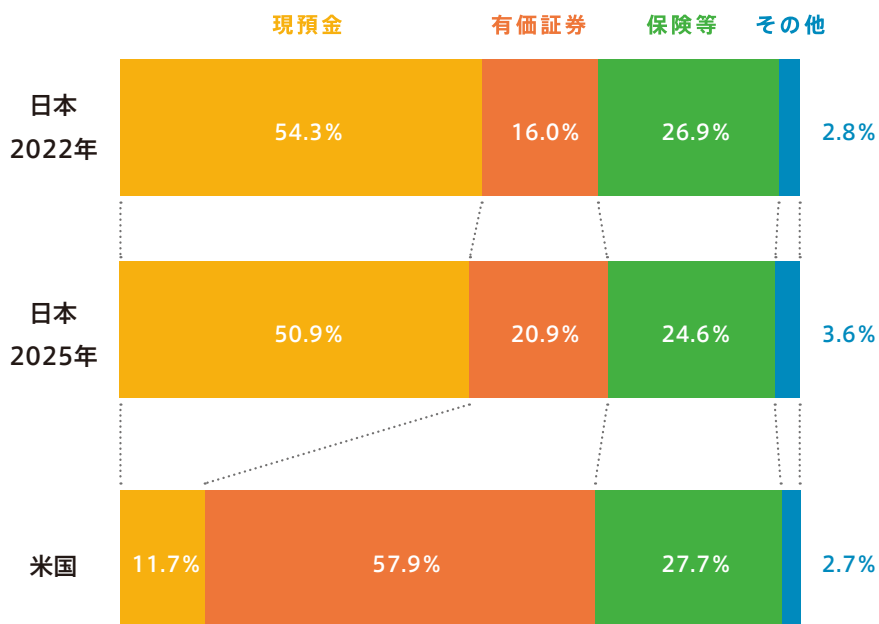


さあ、一緒に学びましょう(^◇^)

皆さんのお金(金融資産)は現預金に！

このままで良いのでしょうか？

個人金融資産の日米比較(2025年3月末)



※日本では、NISAの導入により、2022年～の3年間で有価証券比率の増加がみられます。

日本：出所 日銀 現預金には郵貯を含む
保険には年金を含む

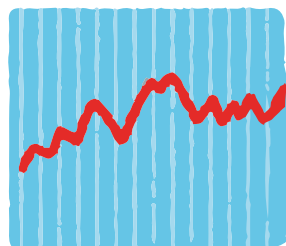
米国：出所 FRB 有価証券は株式・債券・出資金・投信の合計

目次

始めに

1. 「テクニカル分析」とは？
2. 相場（値段・価格）はどう決まるの？
3. 投機と投資
4. 投資は自己責任が基本
5. 主な投資の対象にはどんなものがあるの？
6. 良い銘柄を安く買うのがポイント
7. テクニカル分析は長期運用でも活躍
8. テクニカル分析は心理学？
9. テクニカル分析は過去・現在から未来を展望
10. 投機のプロと張り合う必要はない
11. 安いときは買い場、高いときは売り場
12. テクニカル分析の手法 ①ローソク足
13. テクニカル分析の手法 ②トレンド分析
14. テクニカル分析の手法 ③移動平均線
15. テクニカル分析の手法 ④サイクル分析
16. テクニカル分析の手法 ⑤一目均衡表
17. テクニカル分析の手法 ⑥その他の手法
18. 日本テクニカルアナリスト協会 ①沿革・目的
19. 日本テクニカルアナリスト協会 ②通信教育・資格試験
20. 国際テクニカルアナリスト連盟
21. 投資教育について
22. 確定拠出年金制度と運用
23. 少額投資非課税制度（新しいNISA）と運用

終わりに



始めに

一向に進まない「貯蓄から投資へ」

日本においては、第二次世界大戦後まもなくの個人持ち株比率は70%程度でした。現在は20%程度へと落ち込んでいます。個人金融資産も過半は預貯金です。市場商品が過半を占める米国とは比べようありません。社会構造の違いもありますが、そんな現実から「貯蓄から投資へ」の流れを作るべく、官民挙げて工夫してきました。10月4日を「証券投資の日」と定めたのはその一環です。しかし残念ながらその効果は全く見られていない状況です。

様々な理由があり断定的なことは言えませんが、大きな理由は社会の血液であり人生の血液であるお金について、皆さんが身近なものとしての議論を遠ざけているからではないでしょうか。投資は怖いと思う半面で一部に高速回転の投機が盛んに行われるという矛盾も孕んでいます。

本小冊子はテクニカル分析を学ぶ上での初歩、つまり「はじめの一歩」を踏み出す方向で書かれています。本書をご覧になることにより、「テクニカル分析」を通じてお金に関わる議論のきっかけが作られ、さらに深く学んで頂ければ幸いです。私たち日本テクニカルアナリスト協会が推進している「テクニカル分析」は皆さんの資産運用の一助になると確信しています。

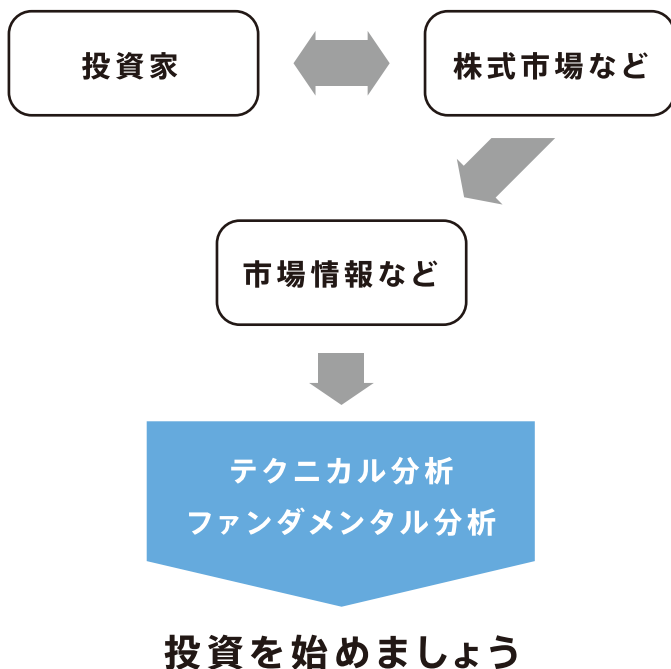
Introduction

「テクニカル分析」とは？

— 初心者に分かり易く解説します —

本小冊子は資産運用に際しての「テクニカル分析」の導入部分を分かり易く説明することを目的にしています。

従って、既に投資経験の豊富な方やテクニカル分析について知識のある方には“物足りない”小冊子です。さらに奥深く学ぼうとする方は、当協会通信教育講座のほか、様々な参考文献が出版されておりますので、積極的に学んで頂きたいと思います。



テクニカル分析とは

金融商品の市場取引の場で、将来の取引価格の変化を、過去に発生した価格や出来高等の時系列パターンから、予想・分析しようとするものです。

極端な言い方をすれば、銘柄の特徴や景気動向・金融政策の動向に関わらず、市場の価格・出来高の変化のみから、現在の水準の高安を判定し、同時に将来の見通しも予想します。相場の過去の習性、投資の時間軸から考えるものであり、その見通しは時間軸・分析手法によって異なる場合があります、唯一絶対のものではない点に留意を要します。

ファンダメンタル分析とは

経済の根幹となる要素(ファンダメンタル)、例えば景気動向・金融政策・財政政策等の変化が市場にどのような影響を及ぼすか、業界動向・個別企業の状況等も含め、将来の相場動向を予測するものです。経済諸指標は発表のスケジュールが予め決まっており、重要なイベント時に市場は大きく反応することがあります。

投資に際しては、両者の分析が不可欠

ファンダメンタル分析は相場の大きな流れ、個別銘柄の良否を把握するのに有効です。他方投資のタイミングを把握するにはテクニカル分析が大きな役割を果たしますので、双方を学ぶことが重要です。

相場（値段・価格）はどう決まるの？

— 基本は売値・買値の出合ったところ —

売り手は少しでも高く売ろうとし、買い手は少しでも安く買おうとするのが当然の心情です。

売り手は自己の買値や市場動向などの先行きを展望して、買い手は様々な指標や先行きの動向などから、その時点における適正価格と判断して売買します。その場合、投資家の視点は、長期・中期・短期・超短期等様々であり、これらの要因が複雑に絡まりあって市場価格は決まります。

従って、価格には正しい価格というものはありません。また、適正価格も様々であり、何が適正かは見方や立場によって異なります。そうは言っても何らかの要素を判断基準としたいと考えるのは当然のことでしょう。

いわばカオス（混乱）の状況の中から、これまで多くの先人たちが論理構成してきたものが集大成され、「ファンダメンタル分析」「テクニカル分析」と呼ばれる分析手法となっています。

注）市場は株式だけでなく、債券・為替・商品などがありますが、以降は株式市場を念頭に説明いたします。



投機と投資

双方とも資産運用と呼べるの？

難しい定義はともかく、一般的に投資は「長期」、投機は「短期・超短期」のオペレーションです。いずれの場合も「売買益」を狙いとした点では共通します。

投資は会社の成長性に着目し配当収入をも念頭に長期運用するのに対し、投機は目先の値段の変化のみに着目した売買であり、悪く言えば“ばくち”的な要素が強いと言われます。投資は企業の基礎的要件（ファンダメンタル面）と投資するタイミングが重要と言われるのに対し、投機は目先の相場変動が重要とも言われています。どちらも利益を上げることが狙いであるとしても、目先の勝負だけで売買することは「資産運用」とは言えません。

テクニカル分析は投機の手段との見方もありますが、これはテクニカル分析の一面のみに着目したものであり正しい理解とは言えません。テクニカル分析は、正しく理解し上手に活用すれば、幅広く資産運用における投資判断の重要なツールとなるものです。



投資は自己責任が基本

— アドバイスを受けても最終判断は自分で —

投資判断(何をいついくらで買うか売るか)は難しいので一般的にはプロのアドバイスを受けて決断します。アドバイスを受けることは、時に「背中を押してもらう」面もありますが、勉強して自己責任で判断することが重要です。

何といっても、良い銘柄を安い値段で投資することが大事です。良い銘柄は、景況感・業界動向・企業分析などを通じて、よく理解できる銘柄を選択することが重要です。このときに参考になるのが「ファンダメンタル分析」です。

明日の相場は誰にも分かりません。勉強してもその通りにならないのが相場です。何か重要な出来事があれば相場は反応します。先を読んで対応しますので事が起きたときは手遅れとも言われます。先を読むためには世の中の動きをよく学ぶ必要があります。心理戦争という面もあります。タイミングの判断に役立つのが「テクニカル分析」です。

判断したものは結果がどうであれ、他人のせいにしてはいけません。それが自己責任です。



主な投資の対象には どんなものがあるの？

株式と投資信託について

東証上場銘柄数は2025年3月末現在3,962銘柄にも達します。外国市場をも含めればさらにその何倍にも達する個別銘柄に投資できる時代になっています。その中から意中の銘柄を探し出すことは極めて難しい課題です。的中しなければ意に反した動きになりリスクも高いものになります。

投資信託(ファンド)はプロが複数銘柄を選んで投資します。国内株だけに限らず、様々な分野に特化して投資できます。日経225ファンド、新興市場ファンド、リート(不動産)ファンドのほか、先進国ファンド、新興国ファンド等々、為替リスクも取り込んだ実に様々なファンドがあります。およそ5,900本以上の公募ファンドの中から自分の期待する分野に特化した運用が見つかります。相対的にリスクが小さく初心者には適した運用手段と言えます。

投資信託に投資する場合でも、投資のタイミングが重要です。長期的観点から見て、今が低い局面かそれとも高い局面か、これを判断して投資することはとても重要なことです。この判断に有効な手段がテクニカル分析です。なお、個別株投資と異なり、当該会社を応援するという側面が弱くなることは避けられませんのでご注意ください。

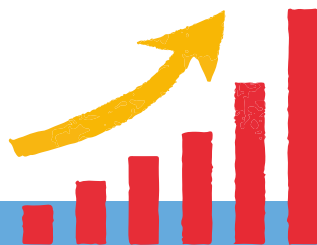
良い銘柄を安く買うのがポイント — どんなに良くても高値掴みでは利益は出ない —

どの銘柄に投資するか判断は個別銘柄の善し悪しとその銘柄の価格水準です。どんなに素晴らしい銘柄でも買われ過ぎて下落過程の中で投資すればリターンは得られずらいでしょう。

銘柄選択は当該企業の成長性・収益性・将来性などから判断されます。この判定に利用されるのが「ファンダメンタル分析」です。またファンダメンタル分析は金融市場全体の流れ等から当該銘柄が割安か割高かをも示唆します。

一方テクニカル分析は市場の流れを、チャート(罫線)などを活用して上向きか下向きか、市場の勢いはどうかを見ます。どんなに素晴らしい銘柄でも買われすぎの時点で買えば利益は得られないでしょう。

投資に際しては銘柄の善し悪しを判定するファンダメンタル分析と、時間軸から見て当該銘柄が買い場かどうかを判定するテクニカル分析は「車の両輪」です。片方の知識だけでは投資成績を上げることはできないでしょう。常に両方学ぶ姿勢が求められます。



テクニカル分析は長期運用でも活躍 — 1分足・日足から年足まで —

チャート分析は投機のサポート手段という間違ったメッセージが見受けられます。それは超短期の投機家がよく利用していることから言われることです。1分間で勝負する人は銘柄の善し悪しは関係ありません。頼りになるのはチャート分析だけといってもよいでしょう。

チャートは分刻みの分析にも使われますが月単位・年単位でも使われます。時間の長さは投資家の投資目的に即して柔軟に対応できます。時間軸の長さによって現在の相場の位置が高いのか低いのか、いずれの解釈も可能です。

例えば2000年以降の日経平均のチャートを見ると、2009年3月に安値0.7万円をつけ、現在(2025年6月)は3.7万円となっております。この大きな流れを様々な分析手法で検討し、それに経済金融の現状を照らし合わせて判断します。もちろん運用するお金の性格などにより、1年間の運用なのか、5年間それとも10年間なのか、千差万別の条件の中から最適解を求めて投資します。トレンド・サイクル・一目均衡表等々の分析手法を駆使しながら安く買って高く売る方法を見出してください。言うのは簡単ですが実践はなかなか難しい面があります。だからこそやりがいのある勉強なのです。

テクニカル分析は心理学？

— 投資家心理をも反映したものと言えます —

希望の銘柄を買おうとすると先ずは人より安く買いたいと思うのは当然です。でも買いたい人が多いと思えば少々ことは目をつぶる。自分が良いと思うくらいだから当然他の人も買いに来る可能性が高い…と考えるのはごく自然なことです。

M&Aの情報が出れば人より少しでも先んじて買おうとします。しかし実際は公表された時点では遅いのが一般的です。業績発表でも結果が出てからでは遅い。そこに人の心理があります。行動経済学・行動ファイナンスという難しい言葉で言われたりしますが、市場価格は単なる需給関係だけではなく、先を見越した心理戦争の面でもあります。

また、つい最近付けた値段が頭に残っているといずれそこまで下がったら買おうという気持ちが強くなります。「安値覚え」があると買えるものも買えないことになります。人間の心理は本当に厄介なものですね。逆に「高値覚え」で売りそこなうということもあります。ですから自分が決めた値段がベストと思うことが惑わされない秘訣です。



テクニカル分析は 過去・現在から未来を展望 —これから先の相場は人間の心理の反映—

テクニカル分析の基本はチャート(罫線)の見方です。罫線をじっと眺めながら、自分の投資期間から推して、今が低い局面か高い局面か、これから上がる局面か下がる局面かを判断します。過去の相場動向・現在の値段からして、現在の値段は買える位置か、または売れる位置かの一助にするものです。過去の経験から足元の流れをどう見るか、先人たちは日々自らチャートを手書きしながら身に付けていったものです。

例えば、日々の移動平均線から大きく乖離したときは、元の平均線に戻る可能性が高いのが一般的です。過去25日間の上昇銘柄数の合計を下降銘柄数の合計で割った数値を騰落レシオと言い、この数値が異常に高い(例えば140%)と相場は天井で下がる可能性が高い等々、様々な考え方があります。あとからもう少し詳しく説明いたします。

基本は人間の心理から人はどう行動するかを経験則に基づいて判断するものですので、いつも100%正しいというものではありません。絶対に正しいことであれば、皆同じ行動をとりますから、結果は変わってきます。あくまでも「最大公約数」的な見方と言ってもよいでしょう。

投機のプロと張り合う必要はない — 視点を変えた投資を —

私たち一般の投資家は、最近よく耳にする「アルゴリズム取引」「自動売買システム」と張り合う必要はありません。投資の時間軸が異なるからです。プロの投機家は1000分の1秒で取引すると言われます。予めコンピュータに組み込んだシステムで高速売買をするものです。素晴らしいシステムのように見えますが人間が作ったソフトに基づいています。完璧なものがあるはずがありません。誰も試行錯誤しながら絶えずベストのものを追求しています。

長期投資をする投資家は彼らと同じ土俵で勝負する必要はありません。自らの投資期間でじっくりと相場動向を眺めながらタイミングを見計れば良いのです。そうすればまったく違う世界が見えてきます。ネット取引をするデイトレーダーはかなりプロに近いことを考えていると思います。デイトレがプロと勝負するのも大変なことです。彼らは好業績銘柄だけに投資しているわけではありません。

アメリカの著名投資家ウォーレン・バフェット氏はPC（パソコン）を使わないと言われています。好きな銘柄を程よいタイミングで買うアナログ投資家は時間と経験を大切にしていると言えます。



安いときは買い場、高いときは売り場 — 売ってすぐに乗り換えるのはダメ —

ものすごく単純化して申し上げれば、安いときに買って高いときに売るのが投資の基本です。しかしこれがなかなか難しいのです。高くなるともっと上がると思うのは人の常です。反対に安くなるともっと安くなると思うものです。テクニカル分析はそうした悩みに対し、一つのヒントを与えてくれます。

心理的に安値覚え・高値覚えがあるため、いざとなると機敏に行動できなくなります。不思議なものです。どの辺りが安くどの辺りが高いか、予めテクニカル分析により水準感を見通し、自分の運用期間の想定と組み合わせ、自らが考える売買の水準感の範囲内でベストを尽くすのが最善の取引ではないでしょうか。

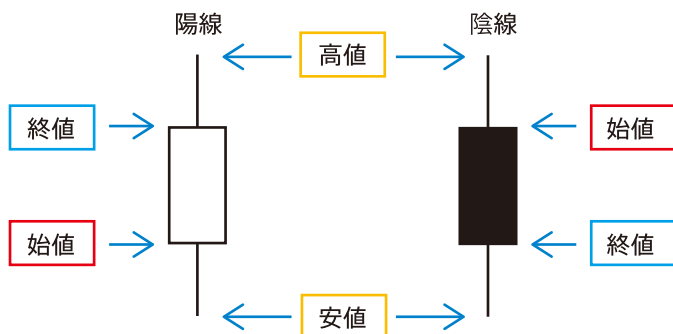
更に、プロのトレーダーを別にして、売却した後すぐに似通った銘柄を買い直すのはあまり有効な投資方法とは言えません。同種の商品に投資するいわゆる「乗り換え投資」はあまりお勧めできません。大きな流れが同じ方向ですから、それなら動かさない方が得策という考え方もあります。株式を売ってしまったなら暫く休む、休むも相場なのです。

テクニカル分析の手法

① 基本はローソク足

英語でも「ローソク足」が通じるほど世界的に知れ渡っている相場の基本となる罫線です。必ずしもハッキリした定説があるわけではありませんが、山形の米相場で財を成した本間宗久氏が今から200年以上前に考案したものとされています。今では世界中どこへ行っても、テクニカル分析はまず「ローソク足」から始まります。皆さんの目に留まることも多いと思います。

一日の取引の始値・高値・安値・終値を一つの図柄に表したものです。日々の取引が基本ですが、週間・月間・年間といった様々な期間でローソク足を書くことができます。陽線は終値が始値より高い場合、陰線はその逆を言います。長年の経験からローソク足の形態には様々な見方があります。例えば三空・三山・三川等々、先人が残してくれたノウハウがありますので是非勉強してみてください。



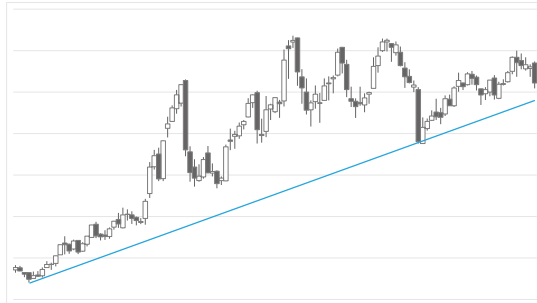
テクニカル分析の手法

②トレンド分析

トレンドとは傾向・趨勢・流れ・方向といったことを意味する英語です。相場の世界では、市場の値動き・流れ(トレンド)を様々な角度から分析することをトレンド分析と言います。右肩上がりの相場が続く状況は上昇トレンド、その反対が下降トレンド、動きが無く横ばい状況であれば横ばいトレンドといった使われ方がされます。

また、持続期間から長期トレンド(月・年単位の傾向)、中期トレンド(週・月単位の傾向)、短期トレンド(日・週単位の傾向)といった使われ方もします。

相場動向に対し、様々なラインを引くことによって先行きの相場動向を考えます。例えば、上昇トレンドが続く状況の中で安値を付けたポイントを結びラインを引きます。上昇トレンドの場合、そのラインが下値支持線になり、割り込む可能性は低いと考えます。



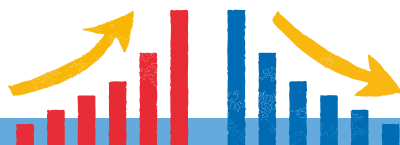
テクニカル分析の手法

③ 移動平均線

毎日の終値の動きをプロットしていくと、その点を結んだ線はゴツゴツした感じの線になります。それを見易く、傾向を分かり易くするために、例えば25日移動平均線なら、過去25日間の終値の平均値を計算し、その数値を当日にプロットします。毎日の値動きが平準化しますので、結果的になだらかな線が引けます。

線の引き方には単純平均したもの他、加重平均したものや直近の変化幅の比重を大きくしたものがあります。

移動平均線を使った分析手法にも様々なものがあります。典型的なものの例では、5日平均線と25日平均線を日々線に加え、当該平均線がクロスする状況を見て相場の強弱を判断する一助にしています。短期平均線が長期平均線を下から上に突き破る場合をゴールデンクロス、その逆をデッドクロスと言います。期間の取り方は運用期間も考慮して自由に変えながら判断します。5年・10年の長期運用であれば月間の移動平均を取るのもよいでしょう。要は自分の運用に即した期間を取りますが、そのためには少し勉強する必要があります。



テクニカル分析の手法

④ サイクル分析

景気には山と谷があります。金融にも緩和と引き締めがあります。これらは経済の循環状況を表しています。経済が一定の状況で何の変化もないということはあり得ません。

その中で先人たちが一定の法則のようなものを見出し、相場の上げ下げに関連付けて述べています。様々な考え方の中から一例をあげます。50年に一度という長い歴史に残る技術革新あるいは戦争をベースに生じるサイクルをコンドラチェフサイクル(長期波動)、10年程度の設備投資循環に着目したジュグラーサイクル(中期波動)、40か月程度の在庫投資循環をベースにしたキチンサイクル(短期波動)といったサイクルがあります。また、50年に一度程度は、これら3つのサイクルが重なり合って大相場になるとも言われています。

ただし、技術革新の期間は短くなり、景気刺激のための大規模公共工事が行われたりしております。世の中は日々進歩していますので、基本となる物事の考え方は不変ですが、時間軸についてはその時代に合った考え方をする必要があるように思います。



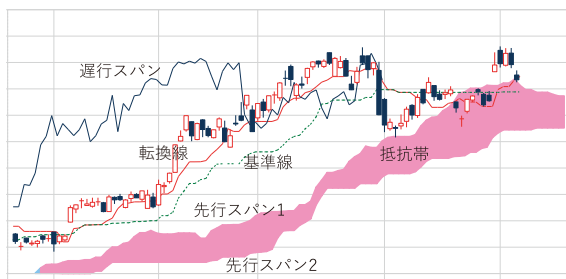
テクニカル分析の手法

⑤ 一目均衡表

皆さんは「一目均衡表」という言葉を聞いたことがありますか。株価チャートに雲のようなものが描かれているグラフです。株式投資をされている多くの方は営業マンから解説を受けておられると思います。しかし、聞いたこともないという人も多いと思います。

一目均衡表は細田悟一氏が考案された相場の見方に関する日本を代表する考え方です。最終的には1970年代に集大成され一冊の本としてまとめられ、出版されています。様々な解説が行われていますのでじっくりと勉強されたい方は、原版を読んでみられてはいかがでしょうか。

ほんのさわりの部分です。現在の相場が、一定のルールに基づき描かれた抵抗帯(通称雲)の上に位置するときは強い相場、下に位置するときは弱い相場というのが大原則です。奥の深い理論ですのでぜひ勉強してみてください。



テクニカル分析の手法

⑥ その他の手法・最近の動向

テクニカル分析の手法は世界各国で研究されており実に様々なものがあります。売買高や売買株数といった出来高をベースにした指標から相場の過熱感を見たり、値段の上昇・下降から計算される騰落レシオ(基本は、上昇銘柄数÷下降銘柄数)でピーク・ボトムを判断したりします。

海外のプロが考案した指標等もいろいろあります。例えば、移動平均線を中心にそこからの乖離状況を、標準偏差(σ)を使って判定するボリンジャーバンドはわが国でも有名です。チャールズ・ダウ氏が考えたダウ理論(市場の平均値は全ての要因を反映する)は今でも米国のダウ平均として使われています。

最近ではシステム売買や高速売買が盛んに行われヘッジファンドが新しい手法を使って売買しています。その際に用いられるのが金融工学とテクニカル分析を融合した新たな手法です。さらに投資行動が心理学と不可分であることから、行動経済学・行動ファイナンスといった分野の考え方もテクニカル分析に取り入れられつつあり、学問としても、日々発展しています。



日本テクニカルアナリスト協会

① 沿革・目的

日本テクニカルアナリスト協会(The Nippon Technical Analysts Association=NTAA)は1978年7月、「我が国におけるテクニカル分析の文献保存や理論の向上・共有」を目的に、およそ80名の賛同者を得て、任意団体として設立されました。

1990年代後半に入り資格試験制度を開始することになりました。現在の3つの資格=MFTA®(3次資格)、CFTe®(2次資格)、CMTA®(1次資格)が確立したのは2001年からです。資格試験開始とともに会員数が増加してきたため、法人格を任意団体からNPO法人(特定非営利活動法人)に改め、諸規定等の整備を行いました。

定款記載の当協会の主たる目的は①テクニカル分析理論の向上②テクニカル分析理論の普及啓発です。この目的に合致した様々な活動を行っております。2025年3月末現在の会員数はおおよそ3,000人です。IFTA(後述)加盟の世界23ヵ国24団体の中では、NTAAは最大のテクニカルアナリスト協会となっています。

日本テクニカルアナリスト協会

② 通信教育・資格試験・セミナー等

NTAAの主たる業務は資格試験の実施と会員間の知識共有です。資格は3段階あり、1次・2次の資格試験はNTAAが行い、3次の資格試験はIFTAが直接行っています。3次試験は、IFTAに登録されていない新しい視点での論文提出になります。当然英文で提出する必要があります。有資格者は、現在全世界で160名、うち日本人が47名となっています。

NTAAの資格試験を受験するためには5か月間の通信教育を受講する必要があります。1次は年2回、2次は年1回、試験が実施されます。

この他、テクニカル分析の普及啓発活動の一環としてセミナー・講演会を実施しています。ほぼ毎週、週1回のペースで、当協会セミナー室において18:30から開催しています。(コロナ過以降オンラインにて開催)また、テクニカル分析理論の向上を目指して毎年「懸賞論文」を募集しています。

最優秀賞には30万円の賞金を進呈します。是非チャレンジしてください。



国際テクニカルアナリスト連盟

IFTA (The International Federation of Technical Analysts)

IFTAは1986年1月にアメリカのデラウェア州で設立されました。NTAA同様、非営利の法人です。2024年末現在傘下には23 カ国24団体が加盟しております。会員総数はおよそ7,000名弱ですので、NTAAの会員数およそ3,000名は最大の規模を誇っていることになります。

IFTAの目的はNTAAと殆ど変わりません。傘下会員に対し資格試験・情報提供を行っています。会員数の多い日本は例外的に日本語でしかも日本独自の試験（除く3次資格）を行うことが認められています。情報提供の面では、ウェブセミナーや会報の出版などを行っています。

年に一回行われるIFTA総会とその後3日間に亘り行われる研究発表会（IFTAセミナー）は、各国持ち回りで行われています。2015年には東京で3回目の総会が開催され、その後シドニー（2016）、ミラノ（2017）、クアランプール（2018）、カイロ（2019）、メルボルン（2022）、ジャカルタ（2023）などで開催されています。世界の一流テクニカルアナリストが一堂に集まり自説を開陳する貴重なセミナーです。多くの方の参加をお待ちしています。



Technical analysis

投資教育について

— 金銭教育は早目に、逃げずに —

皆さんは自分の財産について夫婦間でオープンにしていますか。例えば、残高を開示するだけでなく、お金の入り払い、運用の実態、損益の状況等々…。細かい日常のことはともかく、人生設計上健康に次ぐ重要なお金の問題をオープンに議論することはとても大切なことです。

日本人はともするとお金をタブー視する傾向が強いと言えないでしょうか。お金にまつわることは喋らない、語らない…それが夫婦喧嘩の基になると言っても言い過ぎではないでしょう。金の切れ目が縁の切れ目とはよく言ったものです。

金銭感覚の在り方については小さいころから教育すべきでしょう。お金の大切さや公正性、さらには将来展望(資産運用を含め)について教えることがとても大事です。金融リテラシー＝金融知識という難しい言葉を耳にしますが、単に知識だけでなくオープン性についても教えるべきだと思います。給与の源泉徴収制も金銭感覚を弱めている一因ではないでしょうか。社会問題となっている「オレオレ詐欺」の要因の一つに金融知識不足が関係しているように思います。お金のことは「まず相談から…」と考え、もっともっとオープンにすれば、事は防げるように思います。



確定拠出年金制度と運用 (自己責任型の企業年金制度)

日本の年金制度は設立経緯等から殆どが確定給付型の制度になっています。つまり一旦積み立てたお金は誰がどう運用しているか全く知らなくても決まったお金が定期的に確実に振り込まれる仕組みです。運用は他人任せ。これでは資産運用に無関心になってしまいますね。

これに対しアメリカでは専ら確定拠出型(通称401k)に基づいた年金になっています。自分が積み立てたお金は自分が運用し老後に備えるというものです。運用は専門家のアドバイスを受けながら自らが決めます。運用の巧拙で将来給付される年金の額が変わってきます。こうなると一生懸命勉強してよりよい運用を心掛けるようになります。

日本でも企業が老後の資産形成を面倒見てくれた時代から、自分で積み立てたお金を自分で運用し、老後に備えるという時代に移行しようとしています。金融リテラシーの必要性が叫ばれる中、「貯蓄から投資へ」の流れを進めようとしています。現在での利用者は企業型、個人型(iDeCo)を含め、増えてきています。自分に合った金融商品を選べる時代、お金の知識を深め、明るい生活設計を検討してはいかがでしょうか。

少額投資非課税制度(新しいNISA)と運用 (生涯非課税での運用も可能 新NISA)

「貯蓄から投資へ」を積極化するため、2014年に少額投資非課税制度(通称NISA)が始まり、10年目の2024年からは大幅な制度の拡充が図られます。新NISAでは、年間投資枠も大幅に増加し、現在の「一般NISA」(※株式等を含む運用)が「成長投資枠」に変更され、「つみたてNISA」も今後は「つみたて投資枠」となり、非課税保有期間も無期限となります。枠の再利用もでき、生涯非課税での運用も可能になります。

みなさんに平等に用意された入れ物は徐々に整ってまいりましたが、日本の個人金融資産は今でも安全資産が半分以上を占めています。この入れ物をみなさんが最大限に生かすにはどのように考えれば良いのでしょうか？

長期運用を、ファンダメンタル分析やテクニカル分析の知識で身にまとい、よりよい成果を上げることが求められています。折角の制度ですから、大いに勉強してより良い成果を目指しましょう。



終わりに…

ご質問は当協会へどうぞ。

本小冊子は資産運用及びそれと関連の深いテクニカル分析を知って頂き、併せてそれらを学んで頂く一つのきっかけになればと思います書かれたものです。

資産運用の要諦は安く買って高く売ることですが、どこが安くどこが高いかを判断するのは極めて難しい問題です。特に運用期間が1年か5年か、それとももっと長いのか、期間の取り方によって価格水準のとらえ方も変わってきます。

その際に知っておきたいのがファンダメンタル分析とテクニカル分析という手段があるということです。全ては学ぶことから始まります。長期投資に対応したiDeCoや新NISA制度を利用して、自らが学んだ勉強を実践に移す場としましょう。

相場の世界はアノマリーな面(説明不能な曖昧模糊とした事象)があります。過去の経験も大切なことです。あまり欲張らずに一步一步前進していきましょう。

本小冊子はテクニカル分析の普及啓発を目的に書かれています。ご質問は当協会へご遠慮なくどうぞ。



Conclusion

ふろく

資格試験に合格すると

これが1次資格
取得後の
資格名称です！



名刺に資格の記載が可能に。営業でも使えます



各種特典のある
デジタル会員証が
発行されます。

皆さん、通信教育講座を受けて、
資格試験にチャレンジしましょう。

「証券投資の日」、ご存知ですか？

1996年4月1日、より多くの方々へ証券投資に興味・関心を持っていただき、「貯蓄から投資へ」の流れを加速させる思いを込めて、日本証券業協会が「10(とう)」「4(し)」の語呂合わせから「証券投資の日」を制定しました。「とうしくん」は「証券知識普及プロジェクト」(証券投資の日)のマスコットキャラクターです。日本橋兜町生まれの男の子。より多くの人に「投資」を身近に感じていただきたい願いから2007年に生まれました。



とう し
10/4は
証券投資の日

証券知識普及プロジェクト
マスコットキャラクター

とうしくん

10月4日生まれの男の子。ほのぼのとした外見ながら、今後大きく成長する期待大。兄弟がほか9頭いる。(日証協ホームページより)

「証券知識普及プロジェクト」は
マスコットキャラクター「とうしくん」を作って投資を応援しています。

はじめの一步 テクニカル分析ハンドブック(基礎編)

2014年12月1日 初版第1刷発行

2016年8月1日 第3刷発行

2017年3月1日 第4刷発行

2023年7月1日 2版第1刷発行

2025年7月1日 2版第2刷発行

非売品

発行所 特定非営利活動法人 日本テクニカルアナリスト協会

〒103-0026 東京都中央区日本橋兜町3-3

TEL 03-5847-2231 FAX 03-5847-2232

URL <https://www.ntaa.or.jp/>

E-mail office@ntaa.or.jp

編集人 青木 俊樹

発行人 東野 幸利

デザイン 杉野 寿一

印刷所 スターツM株式会社

本誌掲載記事の無断転載・複製・転売・出品を禁じます。

